インタビュー

川崎フロンターレ

中村 憲剛（けんご） 選手を訪ねて

中学・高校・大学時代はほとんど無名。雑草育ちながら妥協せず、失うことのないサッカーへの情熱が、日本代表として日の丸を背負うまでに、Jリーグのベストイレブンに名を連ねるまでに、成長させた。「可能性にふたをするな」「現在の自分に満足するな」――。自らを鼓舞し、さらなる進化を求める川崎フロンターレの司令塔・中村憲剛選手（27）を訪ねた。

――幼稚園のころ、友達と一緒にサッカーを始めた、と聞いています。以来二十数年。中村さん以外にサッカーを続けている仲間はいないと思いますが、そんなに長く続けられた魅力は何ですか。

中村 シュートが決まったときのそう快な気分とは別に、今でもボールを蹴（け）っていること自体が楽しく、時間を忘れます。壁にぶつかったり、挫折も繰り返しましたが、〝サッカーばか〟だったから克服できたのでしょう。

――強豪チームに在籍していたという記録はないようですが…。

中村 小学五年生のとき、全国大会でベスト16。六年では東京都の大会で選手宣誓や優秀選手に選ばれましたが、中学時代はまったく実績なし。高校もインターハイや関東大会出場の経験はなく、大学でも選手として特別注目されたことはありません。

自慢できる戦績・記録といえば、小学生時代に残る程度。大学はサッカー界の名門・中央へ進学し、三年からレギュラー、四年で主将になったものの、三年の時、関東リーグ二部降格という屈辱を味わうなど、決して誇れたものではない。フロンターレにも請われて入団したわけではなく、大学四年になって、関係者に練習や試合を見てもらうなど〝売り込み〟を図った末に認められたものだ。

――中学、高校、大学と、上に進むほどレベルも高まり、選手も絞られてきて、生き残る道も厳しくなってくるのではないですか。

中村 今も小柄（一七五㌢、六七㌔）な方ですが、中学のころはもっと小さく体格差を感じました。高校では、インターハイ出場選手たちのパワー・スピード・テクニックに驚き、大学に入ったときは、将来のJリーガーたちがゴロゴロいて衝撃を受けました。そのたびに、異次元の世界に迷い込んだ感じで、やっていけるか、と思ったものです。

――その中でもプロは異次元中の異次元。目立った戦績もなしに飛び込むことに不安はなかったですか。

中村 入団するまでは大変だったが、プロ入り後の心配はあまりしなかった。高校でも大学でも、最初は壁を感じたが乗り越えられたし、大学時代にプロとやった練習試合の経験から、努力しだいでプロの水に慣れる自信はあった。それに、もともと楽観的な性格なんです。

大学四年になると、一部復帰が最大の目標に。主将として見事使命を果たしたが、就職活動する余裕はなく、リクルートスーツを着ることはなかった。しかし、卒業してみればプロ選手。フロンターレへの〝売り込み〟が、実は就職活動だったのかもしれない。

――サッカーという競技は、どんな競技ですか。それに対し、どういう姿勢で取り組んでいますか。

中村 サッカーはミスが付き物のスポーツ。昔は、ミスしたらどうしよう、ボールを取られたらどうしよう、そればかり考えて落ち込み、ミスの連鎖を断ち切れない時代があった。今は、ミスが付き物なら積極的ミスは許されるだろうし、犯したミスは取り返せばいいと思える余裕が出てきた。練習・試合・国際経験を積み、選手としても幅や厚みが出てきたと自負しているし、毎試合心地よい緊張感で臨んでいる。

――選手として、チームとしての目標は？

中村 チームとして優勝もしたいが、選手としては現状に満足せず常にうまくなりたいと思う。そこまで熱中できるサッカーという競技に出会えたことは幸せだ。不登校や引きこもりに陥る若い人がいるが、情熱を注げるものが見つからないからではないか。自分の可能性を信じ、妥協せず目標を追いかけることは楽しいことだということを知ってほしい。

二〇〇三（平成十五）年、中央大学卒業と同時に、当時Ｊ２リーグに所属していた川崎フロンターレに入団。瞬時の判断力と的確なパスワークでチームの司令塔に成長し、〇六年にはオシム監督の下で日本代表に初選出、同年のＪリーグベストイレブンにフロンターレから初めて選ばれた。

――サッカーから教えられたことはありますか。

中村 高校でも大学でも、控え選手の時代があった。また、初めて全日本の一員に選ばれたのは二十六歳の時。常にレギュラーだったり、日の丸を背負ってプレーしている選手と比べると雑草育ちといえるでしょう。だから、控え選手や裏方さんの気持ちは分かるし、そういう人たちを思いやることの大切さも知っている。スターばかりで成り立っていないのは、企業や社会でも同じです。

――その気持ちは、共同募金運動の根底にある「たすけあいの精神」にも通じますね。

中村 見えない誰かを助ける、という気持ちを持つことが必要でしょう。だから、町で赤い羽根募金に出会うと、必ず協力しているし、チームとしても災害募金には何度も応援しています。これからは、サッカーボールすら手にすることのできない貧しい国の子供たちに、ボールを贈るなど、自分にできることを探して協力したいと思います。

プロ入りするとき、父から贈られた「感謝・感激・感動」を座右の銘に。感謝は「サッカーも、応援する人をはじめ多くの人の支えがあってできる競技。その人たちへの感謝の気持ちを忘れるな」という意味だ。現実社会も助け合い、支えあいながら動くもの。「見えない誰かへの支援」は、感謝の気持ちの表れにほかならない。

聞き手　大谷 義輝

（神奈川県共同募金会常務理事）

父から贈られた「感謝・感激・感動」の言葉を胸に刻み込み、プレーする中村憲剛選手　©川崎フロンターレ